

第 部

特別講演 1	湿地考古学 - 失われた機会と将来の展望 -	11
	ケンブリッジ大学 ジョン・コールズ	
特別講演 2	サマセットとスウィート木道の謎	21
	エクセター大学 プレイオニー・コールズ	
	はじめに / スウィート・トラック建設年代 / スウィート・トラック建造木材	
	スウィート・トラックに対する謎 / スウィート・トラックの耐用年数	
	リニアバンドケラミック集落 / ボーデン湖の集落パターン	
	ワンゲン・ヒンターホルン集落 / まとめ	
特別講演 3	北アメリカ北西海岸の先史諸民族	33
	ポートランド州立大学 ケネス・エイムズ	
	はじめに 複雑な狩猟採集民と北西海岸 / 北西海岸の民族誌	
	北西海岸における社会システム / 北西海岸での社会・経済的複雑性の発展	
	北西海岸での集落の調査	
	1) 身分と階層化の証拠 2) 世帯の生産 3) 集約的食料生産 4) 交易	
	結 論	
コラム	真脇遺跡 イルカの骨 / 柱 根	48

第 部

第 1 章	ニュージーランドおよび	
	南太平洋地域の先史漁撈と海洋環境に対する人間の影響	55
	ニュージーランド博物館 フォス・リーチ	
	はじめに / 太平洋の島々に住む人々 / 太平洋中央地域での先史漁撈	
	先史時代の漁獲種 / 熱帯海域における主要魚種	
	ニュージーランドにおける主要魚種 / 地域別にみた漁撈パターン	
	時代による漁獲高の変化 / 漁撈活動に対する人為的影響	
	南太平洋での食生活と経済における魚類の位置づけ / 起源について	
第 2 章	台湾南部・鵝鑾鼻地域における先史漁撈	71
	中央研究院歴史語言研究所 リー・クワンチー	
	はじめに / オーロワンピー遺跡周辺の環境 / 魚骨組成 / 出土した魚類遺存体	
	漁撈具の分析 / 石錘の分類 / 石錘の機能 / 釣針の分析と分類	
	考 察 / オーロワンピーの先史漁撈法 / 生態学的観点からみた漁撈 / 結 語	

第3章 縄文時代におけるクリ栽培88

静岡大学 佐藤 洋一郎

DNAとは / 集団の遺伝的多様性とシャノンの公式

縄文時代の遺跡での分析例 / 現生クリでの補足分析 / 結 語

第4章 北アメリカ北西海岸沿岸部の遺跡における
鳥類の後肢骨の少なさに関する解釈95

国際考古学研究所 ランダル・シャルク

鳥類の後肢骨の出現頻度の低さは何を意味するか

鳥類の後肢骨の出土パターンをめぐる新たな考え方

北西海岸の貝塚における鳥類骨の部位別出現頻度

鳥類骨格の翼部と後肢部の出土率の相対比 / 鳥類の骨の出現頻度に関する解釈

従来の解釈の再検討 / 鳥類化石の形成過程と水禽類

後肢の脱落した鳥類の死骸の利用 / 衣料材料としての羽毛とその採集

新解釈の検証 / まとめ / 従来の考古学の仮説の再検討を

第5章 北アメリカ北西沿岸における湿地遺跡の調査111
- ホコ川河口遺跡・環太平洋における比較研究 -

サウスビュージェットサウンドコミュニティカレッジ デール・R・クローズ

民族の移住経路1 / 民族の移住経路2 / 民族の移住経路を示す遺物群

ホコ川河口湿地遺跡事例研究 / バスケットおよび縄細工

北西沿岸部からの北部海岸石刃文化の発展 / 生業の技術

細石刃製ナイフの分布 / 木製ヤスと工芸細工 / 衣 服 / 芸術と象徴 / 結 論

第6章 日本沿岸の先史捕鯨文化131

金沢医科大学 平口 哲夫

真脇遺跡のイルカ漁 / 盤亀台の鯨類画 / 九州考古学による捕鯨史

徐福捕鯨伝説についての民族考古学的考察 / おわりに

総 論 「考古科学的研究法から見た、木の文化・骨の文化」
について153

奈良文化財研究所 松井 章

シンポジウム「木の文化・骨の文化」にいたるまで / 「木と骨」、その研究の歩み

私自身の湿地考古学への参加 / 粟津湖底遺跡 / 湿地考古学第1回大会への参加

トイレ考古学 / ホコ川河口遺跡群

翻訳 「湿地考古学 - 失われた機会と将来の展望 - 」中原 計 大阪大学
「サマセットとスウィート木道の謎」田邊 由美子 千葉県立中央博物館
「北アメリカ北西海岸の先史諸民族」宮路 淳子 京都文科大学
その他は(株)テクボウに依頼し、松井章が監修した。

第 部は、1999年2月9日奈良文化財研究所で開催されたシンポジウム「考古科学的研究法から見た木の文化・骨の文化」での講演を収録したものです。

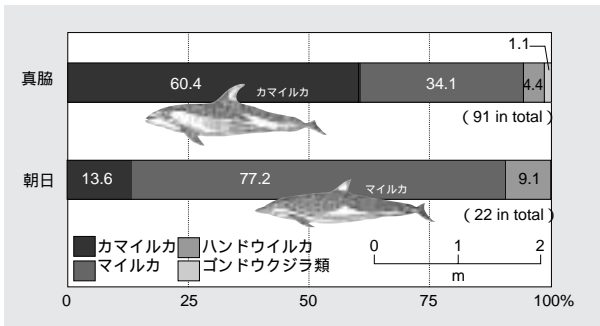


図4 真脇遺跡と朝日貝塚から出土したイルカ類の種構成(第1頸椎による)

北陸の代表的なイルカ出土遺跡である真脇遺跡と朝日貝塚とは、立地、イルカの種構成、ならびに石器組成に大きな違いがある。第1に、真脇遺跡は広い意味で富山湾の入り口付近に位置するのに対し、朝日貝塚は湾の奥に位置する。第2に第1頸椎によれば、真脇遺跡では出土イルカ類のうち60%がカマイルカで占められるのに対し、朝日貝塚では逆に77%がマイルカで占められている。第3に、真脇遺跡では石槍が顕著に出土しているのに対し、朝日貝塚では石槍はごくわずかである。このような両遺跡間の違いは、石槍が主としてカマイルカ漁に用いられたという説の傍証となる

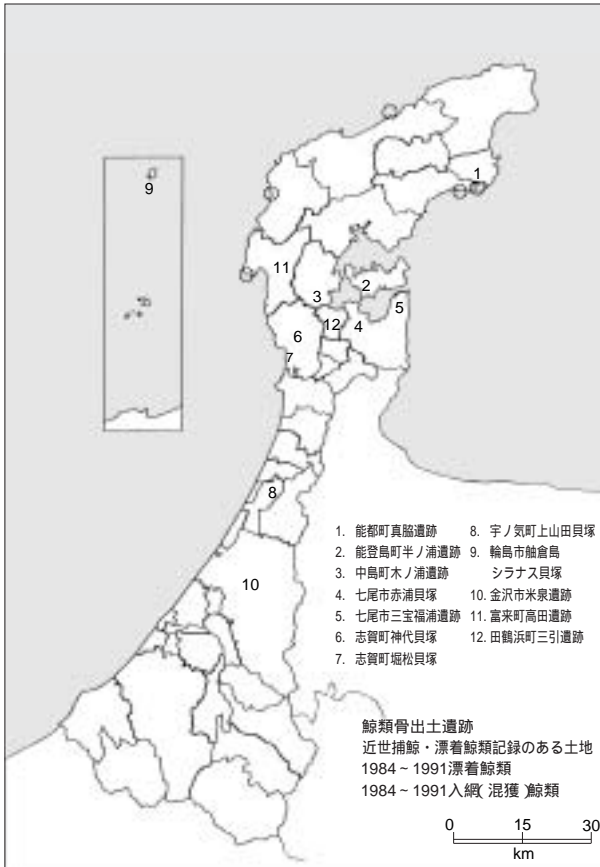


図5 石川県における捕鯨・漂着鯨類・鯨類出土遺跡の分布
能登半島の外浦側には鯨類がしばしば漂着するが、真脇遺跡の位置する内浦側では漂着例は少なく、定置網での混獲が主である。近世においても、外浦側での鯨類の捕獲は漂着・迷込が主体であり、内浦側では定置網を転用した台網による捕鯨がさかんであった。能登半島ではイルカが一度に複数漂着する例は少なく、集団漂着(いわゆる「イルカの集団自殺」)の記録もい伝えもない

う意味のことが書いてあること。

1886~95(明治19~28)年に農商務省水産局によって集成された『日本水産捕採誌』によれば、伊豆半島の田子ではカマイルカが包囲網を突破しやすいことから、カマイルカ漁用の網の構造はマイルカ漁用のものとは違っているという主旨のことが記されていること。

1838(天保9)年に描かれた『能登国探魚図絵』(口絵カラー参照)には、毎年きまった季節に回遊してくるイルカの群れを網で包囲しながら追い込む「いるか廻し」の様子が描かれていること。

1910年代(明治時代末~大正時代)の絵葉書には、真脇に近い内浦町小木で網を用いたマイルカ追い込み漁が行われていた様子が示されていること。

能登半島の外浦側には鯨類がしばしば漂着するが、真脇遺跡の位置する内浦側では、現在でも主に定置網で鯨類が混獲されている。近世においても、外浦側での鯨類の捕獲は漂着・迷込鯨類が主体であるのに、内浦側では定置網を転用した台網による捕鯨がさかんで、能登半島では集団漂着イルカの記録も民俗例も残っていないこと(図5)⁹⁾。

前述のように、真脇遺跡出土イルカの主体が、追い込み漁で捕獲しやすいマイルカではなく、逆にその方法では捕獲しにくいはずのカマイルカであったことが縄文時代イルカ漁の証明に幸いました(図6)。カマイルカ・マイルカの習性の違

いについて、当方の見解に対する批判¹⁰⁾はありますが、近世以来、カマイルカ漁に携わった人々の記録やイルカ研究者の話を参考に、私は仮説をたてたり、データの解釈を行ってきました。近世・明治期の文献については前述しましたが、太平洋戦争中ならびに戦後間もない頃の食糧難の時代に執筆された『海豚と其の利用』においても、網取法(追込網・建切

網・捕り網を用いる追込み漁法)による捕獲に適したイルカは「マイルカ、ネズミイルカ等を主とし、カマイルカは比較的捕獲し難い」とされています¹¹⁾。また、鯨類学者の西脇昌治先生も、カマイルカの習性について「伊豆半島、その他で行われている追込み漁法では、湾口近くまで追ってきて、取り網で遠まきにしておどしながら湾内に追い込もうとしても、群

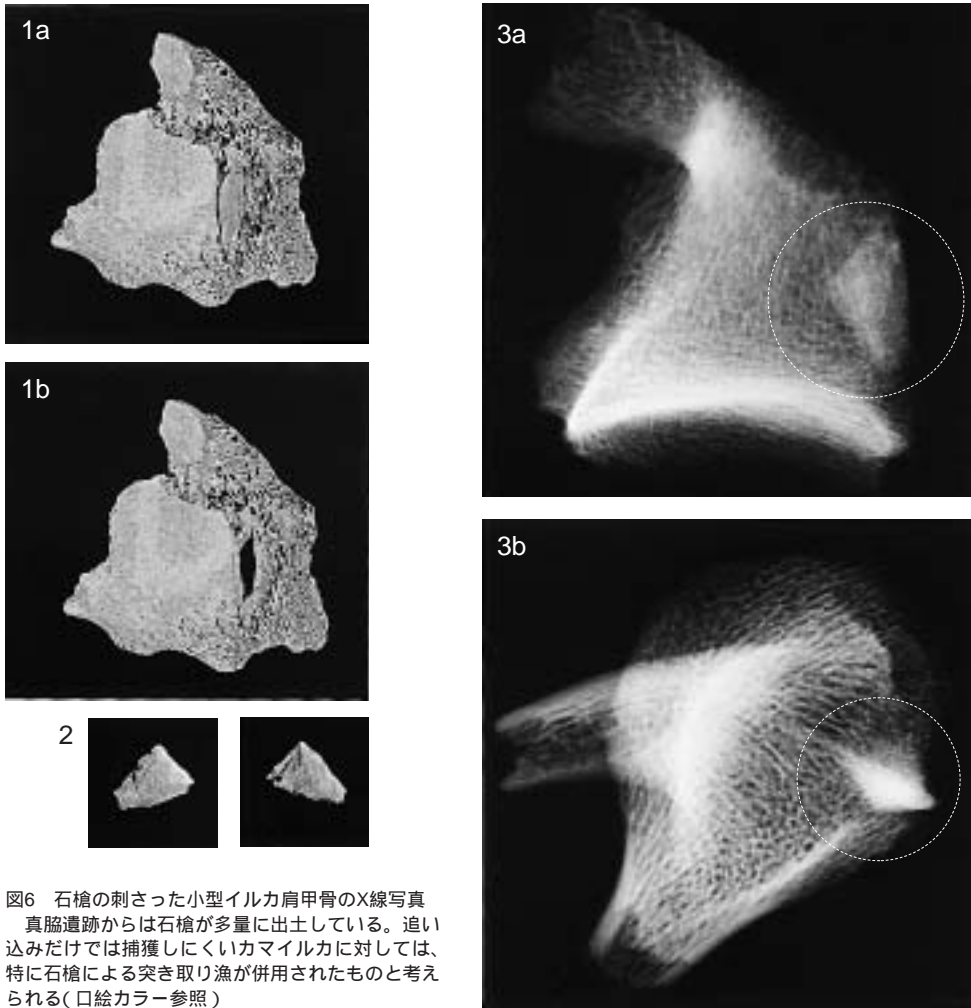


図6 石槍の刺さった小型イルカ肩甲骨のX線写真
真脇遺跡からは石槍が多量に出土している。追込みだけでは捕獲しにくいカマイルカに対しては、特に石槍による突き取り漁が併用されたものと考えられる(口絵カラー参照)
1a 石器嵌入状態にある内側面(×1)
1b 石器除去後の内側面(×1)
2 肩甲骨に突き刺さっていた石器尖頭部(×1)
3 石器嵌入状態にある肩甲骨X線写真(---部分)
a 内側やや前方から b 背縁観(×1)